

米国東海岸大都市における外国人留学生や在留外国人に対する Women's Health Careの現状から見たわが国の課題

齊藤 早苗¹⁾, 辻本 裕子¹⁾, 利木佐起子²⁾

抄 録

言語に不自由を感じて居住している外国人留学生や在留外国人女性へのヘルスケアの現状を把握し、わが国における中国人女性留学生への性の健康維持・増進をもたらす看護支援を構築するための示唆を得る目的で、2013年6月15日～6月22日に米国首都のワシントンD.C.とニューヨークの医療施設など6施設を視察した。米国東海岸の大都市は、クライアントのプライバシー保護、セキュリティ管理が徹底していた。女性へのヘルスケアの現状は、多人種、多文化を受け入れた健康支援リーフレットの工夫や多種言語サービスなど対象のニーズに答えていた。また外国人コミュニティの活用も女性へのヘルスケアに有用であるとの示唆を得た。

キーワード：アメリカ、異文化、女性、看護、外国人

I. はじめに

わが国の2012年度の外国人留学生（以下、留学生）数は137,756人、男女別の構成比は女性48.8%である。出身国内訳は、中華人民共和国（以下、中国）が最も多く86,324人で構成比の62.7%を占めている¹⁾。わが国の留学生受入れ政策は、2008年に優秀な人材の獲得等の新たな観点から一層の受け入れ拡大の方針を打ち出しており、2020年を目途に30万人の留学生受入れを目指す「留学生30万人計画」の骨子が策定されている^{2) 3)}。しかし、わが国の留学生の支援体制は十分とはいえず、「経済」「健康」「言語」「生活」「修学」「人間関係」といった問題に遭遇している^{4) 5)}。多数来日している中国人女性留学生のセクシュアル／リプロダクティブヘルス（sexual reproductive health：性と生殖の健康）に関しては、妊娠、出産、育児についての研究⁶⁾が見られるにとどまっている。

筆者らは、わが国における中国人女性留学生の性の健康維持・増進をもたらす看護支援に関する研究について取り組んでいる。今回、わが国における適切な支援を構

築するための示唆を得るため、異文化を認め合い、共存しながら発展している、米国東海岸大都市における留学生・在留外国人女性へのヘルスケアの現状を視察したので報告する。

II. 目的

米国東海岸大都市における留学生や日本人を含み英語に不自由を感じて居住している女性へのヘルスケアの現状を把握し、わが国における中国人女性留学生への性の健康維持・増進をもたらす看護支援を構築するための示唆を得ることを目的とした。

III. 方法

1. 調査対象

米国のワシントンD.C.にあるThe George Washington University Student Health Service、Providence Hospital Maternal Infant Health Unit、Georgetown University Hospital、ニューヨーク市にあるNihon Clinic、ChinatownのClinic、ニューヨーク市近郊のJapanese Women's Centerの計6施設を視察した。

2. 調査期間

2013年6月15日～6月22日

3. 調査内容

施設見学、施設が配布している女性の健康支援に関する資料の収集、施設の担当者にインタビューを行った。

1) Saitoh Sanae

Tsujimoto Hiroko

梅花女子大学

2) Riki Sakiko

佛教大学

インタビュー内容は、留学生や英語に不自由を感じて居住している女性への対処や配慮についてであった。倫理的配慮については、施設に対しては、事前に見学の目的、意義を説明し承諾を得た。写真撮影は、許可が得られた場所のみとした。インタビューについては、目的、意義、インタビューの拒否、中止は自由であること、インタビュー内容は、論文等で公表されることを口頭で説明し同意を得た。

IV. 結果

各施設で得た情報を記述する。

1. The George Washington University Student Health Service

The George Washington University (以下、GWU) は、1821年設立された私立総合大学である。キャンパスは、ワシントンD.C.の中心部、ホワイトハウスから徒歩10分の場所にあり、高層ビルが林立する街中の数ブロックにわたるキャンパスである。学生数は、学部生と大学院生をあわせると2万数千人である。

GWUのStudent Health Serviceも街中のGWUのもつビルの1つの中にオフィスを構えていた。入口は写真1で示すように、一見では、健康相談や医療を行っているようには見えなかった。月曜日～金曜日の8:30～17:00に開いており、医師・看護師・心理士等が常駐し、予約制であった。オフィスの待合室には、Student Health Serviceのリーフレット（写真2）や疾病理解や疾病予防のリーフレットを多種設置し、啓発に努めていた。



写真1 GWU Student Health Serviceのオフィスの入口



写真2 GWU Student Health Serviceのリーフレット



写真3 Sexual Healthのリーフレット3種



写真4 Sexual Healthのリーフレット2種



写真5 MIHUの言語通訳の紹介ボード



写真6 Nihon Clinic設置のリーフレット2種

性の健康に関連するものは、“Not Ready For Sex”、“Herpes”、“STD and Oral Sex”、“HPV”、“Sexual Violence”などが備えられていた（写真3、4）。リーフレットの表紙に映っている学生は様々な人種であり、配色やキャッチコピーなど、学生の関心を引く工夫がなされたリーフレットであった。

女性の健康支援として、避妊、性感染症（Sexually Transmitted Diseases ; STD）の検査と治療、月経の問題、妊娠検査、栄養カウンセリング、禁煙指導、HPVワクチン接種などについて、相談・治療を行っていた。また子宮頸がん細胞診検査や婦人科疾患の定期検査のために大学のMedical Centerや近郊の産科・婦人科医療機関を紹介していた。

米国では、医療費が高額で、また加入している保険会社によって、医療機関や異なることもあるため、学生は自身が加入している保険会社についてよく把握しておくことが必要であった。学生は、学費と同様にsemesterごとに保険料も払い込むシステムになっていた。

2. Providence Hospital Maternal Infant Health Unit

Providence Hospitalは1861年に設立され、ワシントンD.C.の北東部に位置し、米国の非営利カトリック系統合医療システムであるAscension Healthに加盟している。今回はMaternal Infant Health Unit（以下、MIHU）を視察した。病院内のセキュリティは厳重で、産婦および家族は各ユニットの出入り口の電話を用いて連絡し、出入りしていた。電話の案内版には英語とスペイン語の2か国語が表記されていた。MIHUはLDR

(Labor, Delivery, Recovery) 15室、新生児室、手術室(2室)が同フロアにあり、緊急手術に対応できるよう配置されていた。1年間の分娩件数は約2500件であった。各LDRには言語通訳の紹介ボード(写真5)があり、各スタッフは通訳者を依頼するための連絡先カードを常に携帯していた。特にこの病院ではヒスパニック系の女性の出産が多いため、スペイン語で行われる出産準備クラスや母乳育児を勧めるための教材などスペイン語のものが多種あった。

3. Georgetown University Hospital

Georgetown University Hospitalは、ワシントンのほぼ中心部に位置している。大学病院であるため、先進医療を果たす役割を担っていた。Providence Hospital同様に、言語に関する案内は詳細であった。

4. Nihon Clinic

Nihon Clinicは、ニューヨークの中心地マンハッタンにある。マンハッタン41とマンハッタン44の2カ所にクリニックを開業している。クリニック名が示すように日本人が健康で安心した海外生活を送れるように設立された、日本語で対応してくれる総合医療施設である。マンハッタン41は『レディース・クリニック』として、婦人科検診、低用量経口避妊薬、緊急避妊、HPVワクチン、不妊治療などに対応していた。クリニックが入居しているビルは、セキュリティが厳重で、ビルの入口には、ガードマンが常駐し、インターホンが設置されていた。STDの検査や治療を受けるクライアントも多いとのことであった。マンハッタン44では、人間ドック(健康診断/企業健診)や、消化器内科、整形外科、皮膚科などの診療科を開設し、プライマリケアを実施している。重大な疾患の場合は日本の大手保険会社が連携している病院へつなげるとのことであった。職員には医師、栄養士、カウンセラー、鍼灸師、リハビリテーション師がいた。受診者数は800人/月程で、日本企業の駐在員や学生で99%が日本人とのことであった。クリニックは、ゆったりとした待合室に、健診や生活習慣病予防などについて日本語と英語のリーフレットがおかれていた。STDについては、Nihon clinicが作成したもの、HIV/AIDSについては、“APICHA HIV PRIMARY CARE CLINIC”のリーフレットがおかれていた(写真6)。クリニックには、5カ所の診察室とリハビリテーション室があり、壁などに取り付けられている飾り付けは和風であった。

5. ChinatownのClinic

Chinatownには、約70万人が居住しているといわれて

おり、日本の中華街よりはるかに大規模な中華街で漢字の看板が多く目に付いた。訪問したFlushingにあるChinatown Health Clinic Foundationは大通りに面したビルで、各種診療科のクリニックが入居していた。案内は英語と中国語・韓国語が並記してあった。産科と婦人科と別科の標記がなされていた。

6. Japanese Women's Center

Japanese Women's Centerは、ニューヨークからバスで約2時間のニュージャージー州の住宅街にあり、日本の助産師免許を持つ日本人女性が、米国の助産師免許(Certificated Nurse-Midwife)を取得し、開業している施設である。近郊には日本企業の駐在員が生活する日本人コミュニティがあり、来院者は99%が日本人女性とのことであった。米国の助産師は婦人科の診察や薬の処方ができるため、妊娠・出産に限らず、乳がん検診、子宮がん検診、性感染症の検査・治療など、一般の婦人科に対応した活動を実践していた。なお、Japanese Women's Centerの周産期看護の詳細については、辻本らの報告にある⁷⁾。

V. 考察

今回、米国の首都ワシントンD.C.と米国人口最大の都市であるニューヨーク市とその近郊を訪問した。大西洋を面してヨーロッパ、北アフリカに近く、様々な人種、文化が混在する都市であった。

GWUのStudent Health Serviceのオフィスは、林立する高層ビルの中の一郭にあり、またニューヨークのマンハッタンにあったNihon Clinicも同様で、初めて訪問するものにとっては、日本のように外見からクリニックがあるとわかるということはなく、また、Providence HospitalのMIHUとGeorgetown University Hospital以外は、内部の写真撮影の許可を得ることはできなかった。クライアントのプライバシー保護、セキュリティ管理が徹底していたことに、米国の大都市であることを感じた。

米国の医療費の高額さは、周知の事であるが、GWUでは、留学生はsemesterごとに健康保険料を払い込むようになっていたが、加入保険によって、受診できる医療施設、治療内容、費用が異なる。一方わが国では、1年以上滞在する留学人は「国民健康保険」に加入することになっている⁸⁾。月々の保険料は市区町村によって多少異なるが、留学生は、無職であるため、年額2万円程度である。筆者が所属している大学では、国際交流センターの職員が、国民健康保険の加入のために留学生に同

行し市役所に赴いている。わが国では、留学生も日本国民と同様に自身で医療施設を自由に選択できる。よって自身に適した医療施設を探り続けることができるという点は、米国の留学生とは異なるであろう。しかし、健康支援や受診支援に関して見れば、リーフレットに登場している人物は、東洋人、白人、黒人と多彩であり、病院では多種の言語案内や通訳の配置、教材提供など多人種、多文化を受け入れてきている米国の歴史と姿勢を感じた。わが国も、「観光立国」を目指し、駅・鉄道や街の案内板などは、英語・中国語・韓国語の標記が増えてきているが、健康支援や受診支援に関して見れば、十分とは言い難い。

短期、長期に限らず、英語が日常語で育っていない外国で暮らす留学生、女性のセクシュアル／リプロダクティブヘルスに関するストレスは、計り知れない。陳らは、在日中国人留学生の68.3%が自分の健康問題についてストレスを経験しており、女性および親友のいる学生が特に中国人の友人が大きなサポート源になっていたと報告している⁹⁾。今回は、日本人もどのように対処しているかを知るためにNihon Clinic、Japanese Women's Centerを視察したが、やはり、日本語が通じること、日本人のコミュニティが存在することが、健康支援にとって重要な役割を果たしていた。またニューヨークのChinatown Health Clinicも中国人にとっては、重要な役割を果たしていた。わが国においても有形、無形のコミュニティを活用することが中国人女性留学生の性の健康支援に貢献できると考える。

VI. まとめ

多人種、多文化が共生する米国東海岸のワシントンD.C.とニューヨーク市とその近郊のStudent Health Serviceや医療施設を視察し、英語に不自由を感じている女性へのヘルスケアに関しては、多人種、多文化を受け入れ、対象のニーズに答えていく姿勢、コミュニティを活用することが必要であることの示唆を得た。筆者らは、今回得た知見をわが国における中国人女性留学生の性の健康維持・増進をもたらすための支援に活かしていきたい。

謝辞

本調査に対して、ご協力を頂きましたアメリカの関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

今回の視察は、科学研究費補助金（基盤研究C）課題番号24593416の助成を受け実施した。

文献

- 1) 独立行政法人日本学生支援機構:平成24年度外国人留学生在籍状況調査結果,2014年4月30日,http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data12.pdf
- 2) 寺倉憲一:我が国における留学生受入れ政策—これまでの経緯と「留学生30万人計画」の策定—,国立国会図書館調査及び立法考査局レファレンス,2,27-47,2009.
- 3) 黒田千晴:中国の留学生政策—人材資源強国を目指して—,ウェブマガジン『留学交流』,1(1),1-6,2011.
- 4) 伊藤武彦,井上孝代:全国高等教育機関留学生相談の実態調査第1報,平成8・9年度科学研究費補助金成果報告書,16-38,1998.
- 5) 井上孝代:留学生の異文化間心理学,文化の受容と援助の視点から,玉川大学出版部,7-12,2001.
- 6) GuYan-Hong, Lee Setsuko, Ushijima Hiroshi: 東京大学在学中の中国人女性留学生に対する医療および母子健康管理の必要性, The Tohoku Journal of Experimental Medicine, 204(1), 71-78, 2004.
- 7) 辻本裕子, 斉藤早苗, 利木佐起子: アメリカ都市部における医療施設の視察から見た周産期看護の一考察, 梅花女子大学看護学部紀要, 4, 1-7, 2014.
- 8) 独立行政法人日本学生支援機構: 日本留学ガイドブック "Student Guide to Japan", 2014年4月30日, http://www.jasso.go.jp/study_j/sgtj.html.
- 9) 陳金てい, 高田谷久美子: 在日中国人留学生の勉学・生活におけるソーシャルサポートの特徴とその効果, 山梨大学看護学会誌, 6(2), 17-24, 2008.